
勇者が居なきゃ始まらない！

キリンが逆立ちしたピアス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者が居なきや始まらない！

【Nコード】

N9967J

【作者名】

キリンが逆立ちしたピアス

【あらすじ】

双子の弟とは違い、平々凡々な井上一斗。

どついう訳だか異世界に召喚されてしまう。

よくよく調べれば、なにやら勇者じゃないらしい。

「もしかして、勇者って弟じゃないか？」

俺には無理だと投げ出して、勇者を探す旅に出る！

異世界訪ねて三千里

勇者はいつたいドコなのよ!?

ブログ地球（前書き）

どうも、初めまして！ キリンが逆立ちしたピアスです。

まだまだ未熟者。というか、ほぼ初心者なのでいろいろなご意見お待ちしております！

これから、この前書きでは進行状況を書いていこうかなと考えています。

只今――3話まで書き終わっています。

ブローグ地球

大人気ない？ そんなこと知らない。

齡十七はまだ法律上子供。だから、他人に迷惑かけない程度には
つちやけるのは悪くないんだ。

そう、悪くないのだ！

「一斗、なに現実逃避してるのよ。優斗ならこれくらい当然でしょ？」

後ろから声をかけられたが、一斗はちょっと、それどころじゃない。
い。

「少し待ってくれ亜弥。集中しないと、この壁の向こう、まだ見ぬ
戦士みよくんに失礼だっ！」

場に三枚のカードを置き、台座に刺さった剣を握る。

先ほどの言葉に頭を抱えなくなった亜弥だが、この時ばかりは一
斗の顔に見入っていた。

一斗はまさにアーサー王の如き勇者の顔となっていた。おそらく、
この台座の向こう側にも、一斗と同じような顔つきの人間が座つて
いるのだろっ。一斗はそう考える。

そして、唐突に

——戦いを告げる鐘が、鳴り響いた——

夢のような勝負の時は永遠にもた永さのようで、刹那のように短い。

十分。たった十分。驚くほどストレートに、あっと言う間に負けてしまった。

「は……はぐれメタル………だど!？」

みよくんと呼ばれる人物の姿を立ち上がって確認する。瞬間、両手を地面に付けることになってしまった。

「どう見ても、小学生以上には見えないおぼこい子や………」

「現実逃避してこんな子供みたいなゲームを衝動的に始めるからよ。お金かけた子にはかありません。はい、メタル……ナイト、だってさっき出てきたわよ」

打ちひしがれた一斗の頭に、ひらりと乗せられる一枚のカード。どうやらこれが一斗にはお似合いだった。

それでも戦士だ。戦いを終えれば、友となる。一斗はそうあるべきと信じて、挨拶をしにもう一度みよくんの方へ回る。

が、そこには一斗の理解を軽く凌駕する光景が広がっていた。

「みょうたくん！ あっちので遊ぼっ！！」
「うん、いいよ」

手をつないで去っていく一組の男女。亜弥が幼い二人をみる暖かい視線を戻すと、そこにはゲーム機の前に座り直す一斗の姿があった。

いったい何をしようとしているのか気になり、一斗の行動に注目する。

「勇者にッ なるまで このゲームを 止めないッ！」
驚くほどくだらなかった。

呆れる亜弥に気づかない一斗。彼は正直な話、まだ何もしてないようなものなのに出てきた心の汗をハンカチで拭っていた。

「バカなことを言っていないで帰るわよ。その大荷物も早く渡されることを望んでるんだから」

ゲーム機の横に置かれた麻袋を取った亜弥は、スイカでも投げることができるように一斗に渡す

慌てて一斗は手を伸ばした。

これはやばい。取りこぼしたら足が、絶対に折れる。

「マジ重い。ギザおもス」

ゲームの最中くらいは視界から外そうと死角に置いた袋。十キロは下らないはず。投げ渡すなど言いたくなかった。

「ウルサイ！」

ただ、こうやって現実逃避をするのも毎年毎年のこと、なのだ。そして毎年のように首根っこを掴まれ、ゲームセンターから連れ出される。

ここから先は、いつもと少し……

いや、大きく変わっていくこととなる。

「奇跡よね。二人の間にこうも差があるなんて」

商店街の端まで歩いたところで亜弥から投げかけられた言葉。

それは皮肉だった。

一斗もう慣れたが、二月の十四は男ならば、常人ならば、精神的に立ち直れなくなる出来事が彼のそばで発生するのだ。だから、

「季節はずれのサンタさんだぞーい！」

鞆から帽子と付け髭を取り出してみた。

「ああ、これが違いよね……。双子なのに」

確実にバカにされているのだが、一斗は全く気にしていなかった。

「これでいいのだよ。弟は学校で好かれていれば。有名なのに、目立たない。矛盾した状況の俺だから楽しめるの。……同じ奴が居ないから共感してもらえないだろうけど」

頑張つて弟の土俵に立って奴のように成りたいとも一斗は思わないのだ。

疲れるし。

「それって逃げてるだけじゃない」

「なんて言うかな、亜弥が賢者やら僧侶なんだ。全てを把握して的確な知識や補助」

サンタっ、サンタあと周りを飛び回る子供たちに構いながら、一斗は亜弥を指差した。

「優斗はもちろん勇者かなんか。物語の主人公」

この山は攻略すべきもの。否、そこに山があるから登るのだっ！
見つけたりという顔をした子供たちが、一斗の担いだ袋へよじ登り始める。

「ふんっ……！　んで、俺はパーティーメンバーにすら入らない村人1。入ったとしても、遊び人や何やらとうてい戦力にならないような、見向きも、されないっ、ようなもんっ、だろね。………くっ」

5人。どこからともなく増える、きやつきやつと騒ぐ小猿達。一斗の顔には汗が浮かび、足も生まれたての子牛のように震え始めた。

「おまえら、お、降りてくれっ！！」

「キヤーツ」

「……でよ」

亜弥の消えるような声は、子供達の悲鳴でかき消される。

そのせいで一斗は、目の前の人物の変化に気がつけなかった。

しかし、そんなにぎやかな状況も、次の声でかき消えてしまう。

「なんでそんなにヘラヘラしてんのよっ！！」

「へっ？」

あまりの剣幕に子供達は固まり、一斗は驚いた。

「やればできるのにつ！　逃げなきゃ優斗なんて軽々と超えられる

のにつ！　なんで諦めちゃうのよっ！？」

「いや、だから……………」

「逃げないで答えてっ！！」

いつの間にか周りではしゃぐ小猿たちは消え去っている。

「あいつら、空気読みやがって……………」

逃げることの出来ない一斗は、小さく恨み言を吐くしかできなかった。

そういえばここは端とはいえ商店街。気付くと、二人は買い物中の奥様方の注目の的。

「修羅場？　修羅場なのかしら？　やゝねえ、あんな若いのに女の子泣かして」

なにかが、マズい。一斗の頭を不安がよぎる。

「見ました？　今の、自分は悪くないみたいなあ顔！」

奥さん、良いとこ見てるねえ。正解。目ざとすぎるよっ！？
などと考えるあたり、一斗も相当焦っているらしい。

「ちょっと、向こうで話すよ。ここじゃあ迷惑だ」
「誤魔化さないでっ！！」

誤魔化すつもりなんて毛頭なかった一斗だが、旗色は悪く慌てて次の手を探す。

しかし、見つからない。

大体おかしいのだ。二卵生双生児である我ら兄弟は、小さい頃から似てないねと言われ続けて育ってきた。

勇猛果敢、容姿端麗、文武両道、才色兼備、え〜っと他に褒めるための四文字熟語あつたっけ？

そんな風に一斗が考えるくらいの出来が良い弟。

対するは、怠惰怠慢、自堕落、快樂主義的。顔は目立たない。運動は出来ないこともないが、性格でアウトな兄である。

「落ち着け、話す。ただ、遅くなったから歩きながら話そう？」

「だめ。ここで言うて」

どうやら、頑固モードに入ってしまったらしかった。

こうなると、手の付けようがないのは我ら兄弟の共通認識。

抵抗は無意味。諦めるしかないようだった。

「はいはい、じゃあ一度しか言わないからな。ちゃんと聞けよ?」

「うん」

亜弥の顔が真剣になったのを見て、一斗は困ったように頭を掻いた。

「俺には、二人に内緒で決めたことがある」
一呼吸置いて周りを見た。

オバサマ方。出歯亀過ぎッス。無言で聞き耳立てないで。

「それは、た……………」
「……………へ?」

そのまま、一斗は姿を消した。

弟宛のチョコレート達と共に。

ブログ地球（後書き）

話の中の裏話的な何か……

作「なあ、一斗や」

一「なんだい、作者」

作「ここでは俺やお前たちが疑問に思ったことを、議題に挙げていくつもりなんだ」

一「全部お前じゃ（ry）」

作「と言うわけで、一斗。なんか出せ」

一「……………俺、今回。人生最大の事件なんで、それどころじゃないんですが」

作「ちつ、使えん。奈良俺が言おう。おぼこいつて、女の子にしか使わないんじゃないか？」

一「いきなり難易度高い話なんだが…………マジで？」

作「詳しくは調べてないんだが、世慣れしてない娘って意味だった気が…………」

一「次から気をつける」

作「こっちできちんと調べておくよ」

詳しい方いたら、教えてください。辞書じゃよく判らなかつたんです……

ブログとある城（前書き）

……………一話目にしてごめんなさい

一応十話まで書けました、

書けましたが、今四話までしかできてません。
今週中に次話を上げるので、詳しくはそこで……

ご意見ご感想、お待ちしております！
それではどうぞ！！

プロローグとある城

なにやら胸の中心に引き込まれるような感じがして、一斗は歪む視界に目を開けていられなくなる。

直後息すらできなくなった。

まるで突然海の中に現れたかのように、息を吸おうとすると代わりに塩っ辛い何かが入り込んでくるのである。

同じく塩が原因なのか。すごく染みて、目もあまり開けられなかった。

暗黒の世界で、一体どちらが上でどちらが下なのかすら分からない。

もがけばもがくほど無駄に酸素を使いそうで、一斗は動くのを止めた。

手で顔を覆い、小さく息を吐く。

よし、上はこっちだ！

出てきた空気に従って、懸命に手足を動かす。

遠く、向かう先に。

小さな明かりが見えてきた……

＋
＋

その日。ついにその日はやってきた。

城内は慌ただしく、まさに城が揺れるように駆け回る、人、ひと、ひと。

大臣たちは必要経費の上方修正を行うために駆け回り、瘦けていた。

神官たちは歓迎のための食事やら何やらを準備し、転けていた。

そんな、くだらない冗談が実際に起こるようになってこまいな時間、もう終わりなのだ。大儀式の間には二十余名が鎮座している。「ふう……」

その中心付近に立つ少女は緊張を解すために、細く長い息を吐いた。

期待が強いのかかる。

普段から大勢の期待を背負う彼女ではあるが、今回ばかりは勝手

が違う。

この魔法だけは、彼女自身が成功するイメージすら持てないのだ。

魔法とは、それが行われた結果を強くイメージする必要がある。

望んだ結果が曖昧だった場合、効果に幅が生まれてしまうのだ。

いや、実際のところはさらにヒドい。現実主義な彼女は見たこともない空想の人物に対して使う魔法など、考えられるはずもなかった。

つまり成功のイメージがないばかりか、失敗のイメージが先行してしまっているのだ。

だから、今度の儀式だけは皆の期待が重かった。

「アン、ガンバってくださいね」

そんな期待など全く持っていない声援の人間も、中にはいたが……

「バカものっ！！ 神聖なる儀式の直前に気の抜けた声をつ！」

「姫様の名を呼び捨てるとは何事だっ！？」

ほぼ最後列からかけられる不作法な声に、大臣たちは異常に反応した。

実際のところ、アンは……正確にはアンナシエッタ姫はアンと呼ばれることに抵抗はない。むしろその後に響いた怒鳴り声の方が迷惑だと感じていた。

面と向かって言えるはずもないが。

しかし、気の抜けるような柔らかい声を出した男は違う。

「クリスマス大医師。声援はありがたいのですが、下手をすると集中が切れてしまいます。皆様も、お静かに」

だから、アンは問題が発生する前に忠告をした。ただ、あまり意味はないだろう。

『全く成功する気がしないアンには言われたくありませんね』

このように、精神同調魔法で思念会話ができる間柄なのだから。

『それは言わないでくださいね、クリスマスさん！ と言うよりも、こんな高難度の魔法をくだらないことに使わないでください！』

『この魔法、精神同調までが難しいだけです。波長が近ければ自ずと難度は下がり、あとは思考の制御だけ。幼い頃から後ろに着いてきていた貴女です。精神同調も当然楽というわけなのですよ』
実のところ、すでに儀式は始まっている。そんな中で、二人は思考で会話をし続いていた。

『ほら、そこは右足からでしょう。分割思考処理など基礎中の基礎ではないですか』

『……もっ』

ほぼ、プライベートな秘匿回線。やりたい放題である。

『少し静かになさってください、クリス大医。……姫様が困ってます』

『……うん？』

『……へ？ クリスさん、隠蔽処理は行いましたよね？』

『……ああ、きちんと発動しているね』

『ならば何故、侵入されたのですか？』

『魔法、得意……ですから』

アンの疑問に答えたのは、その矛先本人だった。

『さすがに、得意で済ませられるようなことはありませんよ？』

隠蔽処理が行われた魔法に介入する。

それは術式をリアルタイムで読み取り、負けない早さで対応する魔法を使うということ。

反射的に魔法の取捨選択をしなければならないのだ。

『それより姫様。まもなく聖杯が着ます。無駄なことに魔力をお使いにならないでください』

『ええ……。ありがとう』

魔法の出所を探そうと探知魔法を使おうとすると、すぐさま彼女自身から自分の情報が送られてきた。

『兵士隊第六分隊所属、王立図書司書官。ここでの役割は………た、ただの記録係？』

『はい、書記速度がもっとも早かったため選ばれました』

彼女の方を目端で見ると、まだまだ幼さが感じられる。おそらく従軍ギリギリの年だろう。

『大丈夫です、姫様。このことは記録しませんから』

なにやら勘違いをしたらしい。

『それでは、迎えの儀。頑張ってくださいませ』

一方的に魔法を切られてしまった。

『まあ、彼女の言う通りです。やりもしないで、できないなどアンらしくもない。とりあえず、全力でやってみるべきでしょう』

彼女の目の前には、台に置かれた聖杯がある。

十年間、毎日そそぎ込み続けた彼女自身の魔力。おかげで魔法を使う体力も増えた。

毎日毎日、気を失う寸前まで絞り取られ続けた成果。

それを、手に取った。

『二人とも、聞いてください』

記録係の彼女も、こちらの話は感じているだろう。そう信じて話し始める。

『この十年、ずっと考えていたんです。』

私の魔法でここに来る方は、元の生活がある。突然切り離されてここに来るのです。

大臣や神官は名誉なことと言います。ですが、知らない土地、知らない人間のために無理矢理、死地に追いやられるのです。

なんと……お詫び申し上げればよいのでしょうか」

私は、無力です。

そうやって十年もの間、アンは悩み抜いたのだ。さすがに、返事は来ないだろう。それでも良かった。

これは独りよがりの誓いなのだから。

『もし、本当に人が来るならその方は……
私が、命を懸けて送り返しましょう』

魔法陣の中で、聖杯の力を

解きはなった。

作「アンナシエッタ嬢の！」

—「何故なに魔法学〜！」

ベ「……ドンドンパフパフ」

—「と言うわけで始めました、何故な魔学」

作「いや、まあなんでそんな略し方したのか判らないけど、始まっちゃったな、何故な魔学。……言いやすい」

—「言いやすい」

作「すつごく言いやすい」

ベ「で、姫様はドコにいらっしやるんですか？」

作者、指さす。

作「この超空間が理解できずに、現実逃避中」

—「だめだこの企画っ！？ あいつがいなきゃ、物語が大きく壊われるわ！」

あと「べ」ってだれだよ！？ 新キャラが突然生まれてるし！」

作「だいじょーぶ。ここを出ると、ここでの記憶はなくなるから。ちなみに、ベリアは新キャラじゃない」

ベ「次でわかります」

—「次って……。あれ？ 何で今日はクリスが居ないんだ？」

作「急患」

作「まあ、栄えある一回目だが主役不調だ。俺とベリアで説明する」

ベ「よ、よろしく願います……」

一「まったく関係ないんだが、今気づいた。物語の時系列とかみ合
ってなくね？」

作「これは幕間劇だ。つまり……超空間」

一「説明たるくて便利な言葉に逃げたっ!？」

ベ「まず一つ目の魔法。……精神同調魔法系統、思念会話です」

作「簡単だよ。相手の受信波長に合わせる無線だから」

ベ「難しいのは合わせるまで。たまに、なにも考えないで合わせる
双子もいるくらいです」

一「そーなのかー」

作「ただし、それに隠蔽をすると難易度が跳ね上がる。それをジャ
ックするとなると、企業にハッキングするレベルじゃないか？」

一「ある程度、魔法の原理とかに詳しくなきゃいけないってことか」
作「そういうことだ」

べ「では、次ですね。……召喚です」

作「これはアンが一番詳しいだろうから、次回に後回し。代わりに聖杯について説明しよう」

一「あれだろ？ 使用者の魔力を溜めて、好きなときに好きな量だけ使えるっていう都合のいい道具」

ア「聖杯はそんな可愛げのあるものじゃありません！！」

作「あ、復活した……」

一「え？ え？」

ア「あれは、周囲の魔力を気の済むまで吸って、一気に放出する魔法具です。誰か触れた場合は、その人の魔力を最後まで吸い尽くします。それこそ干からびるまで。」

別の人にたたき落としてもらうまで離せません。私が毎日死ぬ思いをして、十年間かけてためました。

魔力を解放したときは、都市一つ分はゆくに破壊されます。

解放されるタイミングに合わせて魔法に使うことで、常識では考えられない魔法を使えるようになるのです。

ちなみに今回の召喚魔法は、制御に三人、術者の私。計四人で構成され、いずれも自分以上の魔力を操れるよう訓練されてきました。もはや今日、この日のために私は生まれました。そう言っても過言ではありません」

一「……もはや、呪いの道具」

作「ちなみに、製作者不詳。年代は千年以上前。暴走回数二回。いずれも、一国が滅びたらしい」

一「なんという時限爆弾。どうして使う気になったのかわからない」

ベ「伝承では、方法などは不明ですが聖杯で勇者や英雄を召喚して
いたらしいです」

ー「それなんてエロゲ」

作「大丈夫。こんな作品読む人少ないから、気付かれない！」

ー「そういう問題じゃないっ！！」

ベ「本当に突然ですが、と言うわけで、何故な魔学。本日はおしま
いです。……ありがとうございます」

作「次回があれば、またお会いしましょう。ごめんなさい」

ー「最後の挨拶がそれか」

ブログとある城（後書き）

一斗「なぜ、どうして後書きにできなかった」

作者「二千字じゃたりんかった。正直すまん」

一斗「一週間以上開けた理由は？」

作者「予定が、狂った。と言うか、物語世界の啓示があったから変更したら、修正が利かなくなった」

一斗「詳しく」

作者「三話で話す。頼む、俺に少し整理する時間をくれ！ 全部…
…全部台無しなんだっ！！」

一斗「それは、これから先のストーリーがか？」

作者「うん」

一斗「なら、今までの予定で行けばいいだけじゃ……」

作者「極力面白いものを提供するの、こういったところで投稿している者の使命だと思っんだ！」

一斗「本音」

作者「やるなら、ランキング上位載せてみたい！」

一斗「本心」

作者「上位なんて載ったら怖くて泣く。百位に入るとすら思っ
てない」

一斗「びびり」

作者「分相応って言葉は、逃げの言葉じゃない……。生き残るための教示だ！」

結局やっぱり窒息死（前書き）

間に……合わなかったorz

ごめんなさい

携帯で書いている分よけいに手直しが難しく、駄文化が促進されております。

「何かいてるか分からない」とか、「ここを詳しく」とか、「こんなやつまんねえよ！」

などご意見があつたらお待ちしております！

結局やっぱり窒息死

「一斗のやつ……。逃げたわね！」

いったいどういう過程を経てそうなったのかは判らないが、亜弥の中ではそう決着が付いたらしい。

そして本気で逃げ出した一斗を捕まえることは、ツチノコ並の難易度だということも

彼女たちは知っていた。

商店街のアーケードをくぐり、位置との家へと歩き出す亜弥。

「優斗を使って絶対に探し出してやるんだからっ!!」

新たな覚悟とともに、新たな物語は廻り始める。

＋
＋

迎えの儀は、成功したと言っていいだろう。多くの人の望み通り、まだ若い男が召還陣に現れたのだから。

大臣、神官から上がる歓声。

これで救われただのなんだのと、喝采に包まれる。
その中で神妙な面もちの三人に気づくものはいない。

しかし大変なのはその後だった。

「あくっ……かあっ」

灯りまでたどり着いた一斗はまた、やはり見知らぬ場所に出たことに気づいた。

そしてもう一つ、目の前に人間がいる。さらに奥には松明がある。歓喜した。

空気っ！ 酸素っ！！

と、嬉々として吸い込もうとした一斗。

しかし結果は先の通り、何故かまだ呼吸ができなかった。

それどころか残っていた最後の空気が、吸い出されるように口から抜けていってしまう。しまいには、なんだか胸のあたりが尋常じゃない痛みを覚え始めた。

都内の高校二年生。不可思議な窒息死！？

なんて新聞記事はシャレにならないと、もがく一斗。

「大丈夫、ですか？ あのっ！」

アンだけがそのことに気づいた。
すぐにクリスも駆け寄ってくる。

「どきなさい、アン！ 皆さんも静かに！！ 兵士隊長、あなたが一番足が速い。すぐに総代医師を！ 先ほどの記録係さん、こちらへ。アンにも手伝っていただきます」

先ほどまでのひょうひょうとした姿ではあるが、声だけは張り上げる。さすがに、その場の騒然とした空気は静まった。

すでに、先ほどまで言い争いをしていた兵士隊長はいない。さすがである。

「さて、記録係の……確か名前は、ベリアーデでしたね」
先ほど送られてきた彼女の情報から思い出す。

「ベリアと呼んでください。……ええと、私は何をすればいいのですか？」

軍属と言うのが信じられない細い腕をまくり、すでに準備を終えていた。やらなければならないことがあると理解しているという点では、やはり軍人なのかもしれない。

「ではベリア。彼の、異常なまでに溢れ出す魔力を抑えてください。魔力過剰による暴走がおきそうです」

「使う術式は干渉型魔力封印。……でいいでしょうか？」

予想外の提案に、クリスの頬が軽くひきつる。

「ふむ、できるならば。それが一番負担がかからないでしょう」

「完全に抑えることは無理ですけど……」

「それよりも、私の治療が終わるまで続けられるかが問題です。あの程度は流し続けて構いません」

干渉型魔力封印術は名前だけならば聞こえはいいが、自分の魔力を体内に流し込み、魔力孔からあふれる魔力をせき止める、いわゆる力業である。

先ほども言ったが、通常では考えられない量の魔力を、力技で抑えられる少女など、とてもじゃないが信じられなかった。しかし、そんなことを言っている場合でもない。

「アン、横から漏れ出す魔力を使って魔力言語認識魔法を」それは、こちらの言葉を魔力に変える魔法。耳ではなく、直接相手の脳に届いて彼が知る言葉に変えるもの。

「分かりました。彼が魔法を使える状態とも思えません。思考を読み取る魔法も並行させましょう」
「頼みますよ」

後から考えればここから先すべては、なんとギャンブル性の高いものだったか。

呼び出された彼の才能、魔力操作にかかっていた。

（体が辛くなくなっても、まだ息ができないっ!?!?）

きれいな茶髪の少女が両手に胸を当てた時点で、きしんでいた体は痛みが和らいだ。

それでもそろそろ、尿意まで感じ始めている。一斗は限界だった。「少年。言葉はいい。必要ないから、私の質問に頭の中で答えてくれ。私の言葉がわかるか?」

（それどころじゃないっ！ こ、呼吸ができませんっ！）

どうやら意思疎通はできるらしい。

「呼吸ができない。筋肉硬直が見られる。典型的な魔力枯渇症だ」

しかし、原因がわからない。先ほどから、ベリアが魔力を抑えているとはいえ、異常な魔力であったはずだ。

「クリスさん！ 彼、魔力孔付近にしか魔力がありません！ 勢いが強すぎて体にとどまらないみたいです！！」

「よく見つけました、アン。それでは少年、魔力を全身に廻らせてください。呼吸ができるはずです」

（……魔力？ 廻らせるってなに！？）

これは、クリスにも想定外であった。この少年は、魔力を知らない場所から来たらしい。

「それでは、私が手伝います。できなければ、死ぬことになります。いいですね？」

（いきなりで意味分らないですっ！ 死にたくないに決まってるじゃないですかー！！）

「その意気です。では、今から少年の体にあふれ出る魔力を私が操作して廻らせます。感じてください。ちなみに、タイムリミットはこの少女の体力が持つまでです。急ぎましょう」

喋ることのできない一斗はうなづいた。クリスが手をかざす。

（塩っ辛えっ！）

どうやら、この少年は魔力を塩辛く感じるらしい。クリスは安心した。これで第一段階、魔力を感じることはできたらしい。

「それが魔力です。慣れれば味でだけじゃなく目で確認できたり、その味も調整できるようになります。さあ、呼吸ができるようになったでしょう？」

反射的に一斗は、止めていた息を思いっきり吸う。

「うっ、はぁーっ！ はぁ、はぁっ」

これで当分死ぬことはなくなっただろう。あとは、彼の努力次第である。クリスは一息ついた。

「では、先ほど塩辛いと言っていたものが、頭の前からつま先まで満たされているイメージを」

（なんか、某能力。念みたいだな）

一斗は、とある漫画を思い出す。

「ふむ、そのイメージで正しいですね。その通りに」

正しかったらしい。某T先生、少しでも描いてくれていありがとう。まさか命を救われるなんて。

でもできるなら、もう少し読者のわくわくを満たして欲しい。

「優秀です。ここまで早く行くとは思いませんでした。最後、魔力孔を絞ります。ベリアが手を当ているあたりに意識を。魔力が出ているのがわかるでしょう？」

頷く一斗。まさに念であると言えない。あっさり理解できえしまった。

「その、出る穴を思い切り小さくするイメージです。一度掌握してしまえば、よっぽどのがない限り暴走することはないでしょう。ここが勝負どころです」

（……それは知らない）

「そうですか。では、自らの努力しかありません」

「ふんっ!!」

とりあえず踏ん張ってみる一斗。下から出てきそう。

「下品です。この三人には考えが漏れるのですから、余計なことは考えないでください」

一番着飾っている外人女性に怒られてしまった。

（そつえば、全員日本人じゃない……）

「余計なことは後で考えてください。これは悪ふざけなどではなく現実。ベリアを見ればわかるでしょう?」

促されて少女を見れば、額に汗が浮かんでいる。見た感じ、あまり時間もないらしい。

しかしまず、穴って何だろうか。そこから分らない。

見かねたベリアが、声をかける。

「魔力はどうやって出てきていますか? 私が少しづつ抑えを外しますので、感じてください。それを、小さく、弱い流れに変えればいいのです」

胸の痛みが強くなってきた。

「外の魔力量に対して、流れ出てくる魔力が強すぎるために流れが速くなるのです。道である少年の体が持たないほどに」

冷静に話すクリスに、なんだが一斗は腹が立ってきた。

「医者とは、常に冷静でなくてはなりません。さらに言うならば、少年が死んだところで興味すら、ない」

その言葉に、アンはさすがに怒ろうとする。

しかしそれより先に、一斗がベリアに話しかけていた。

（どうやったら、みんなみたいに話せるようになるんだ？）

「ああ、えっと、それでしたらこの術式に魔力を通して、言葉に魔力を乗せればいいんです」

瞬間、頭の中に全く意味のわからない文字の羅列と、その文字に魔力を通す方法というものが流れてくる。

「意味、わかるか？」

「ええ、まさか一瞬で魔力言語術を習得するなんて……」

「魔法は、このような術式を覚えることで使えるようになっていきます。今回は意識共有魔法を使って直接渡しましたから、忘れなければいつでも使えますよ。これほど鮮明に思い浮かべられたら、忘れるとは思えません」

「意識共有魔法……って会ったばかりの人間に対して!？」

驚き、声を荒げるアン。意味がよく分かっていない一斗だったが、そんなことはもうどうでもよかった。

「ベリア、だっけ？ 無駄な時間を使っちゃったけど、ちょっと別件で死にたくない理由ができた。もう少しだけ頑張ってくれ」

「は、はい？ あと十分ほどならなんとか」

あそこまで言われて黙ってはおけない。動けるようになったら殴ってやる。一斗は頭の中だけでそう考えた。

「……殴れるものならやってみなさい」

（読ま……れた！？）

「使いこなしすぎです！」

リラックスしようと、思考が読まれる今の状況を存分に使つての冗談。

そしてまた、一斗は派手な格好の女の子に突っ込まれていた。

「この城の姫です！」

「アン、集中させてあげなさい」

「このっ……！？」

大声を出すアンに、たしなめるクリス。

（姫様が、こんな人前で汚い言葉を使ってもいいのか分からないが、そこは置いておこう）

寝ころんだままの茶化す一斗。

「私、呼んだ人は何があっても還すつもりでしたが、なんだかもう……！」

アンがため息を吐いている。

もう十分だろう。一斗はふざけながらも理解しようとした感覚に集中した。

「さて、出てくる感じは分かったけど、小さくする感じが分からない」

「切り替えが早すぎです!!」

「大きな手を想像してください。……ふさいで、その指の間から洩れる感覚です」

自分の体力を気にしたベリアがすぐさま助言する。

「あ、ベリアさんまで無視する……」

「慣れたら、その指の間を大きくしていくんです。まだ、魔力孔が大きくなるかもしれない。小さくして抑えるのはいけません」

「とりあえず、イメージはできたけど……減ってる?」

一斗の感覚では、一時間ほど前していたゲームせいでドロドロの手しかイメージできない。不安だった。

「たぶん、大丈夫。……これで安定するはずです。そのうち、専門の方に見てもらいながら手の感覚は調整してください」

「……はい」

(なんかもう、エセ医者よりも医者らしい)

安心したのか、少しだけ眠くなった一斗は目をつむる。

「確かにそうですね。なら、私も少し医者らしい事をしますか」
何かで、目がふさがれた。

「な、何するつもりだ?」

嫌な予感がして振り払おうとするが、関節が痛いほどにきしむ。

「いえ、何も怖がることはありません。痛みを取り除くための薬を投与するために、ちよつと意識を失ってもらうだけですから」

一斗の警鐘が、シャレにならないと鳴り響いた。

「この、首に振れている手のようなものは何でしょうか？」

「いえいえ、気にしない。おやすみなさい？ 勇者様」

「ぐ、うええ……っ」

こうして、一斗の異世界初日終わっていった……

作者「みんな、集合！」

声にあわせて虚空から一斗、アン、ベリア、クリスが不時着。

クリスだけはきちんと立っているようだ。

クリス「今日は私ですか」

作者「そんなことはいいつ。たいへんなことが起こってしまった！」

アン「……大変なこと？」

作者「ああ、そうだ。ひよつとすると、亜弥、優斗がここに来るかもしれん」

異世界組全員、固まってしまった。なぜだ？

作者「ああ、みんな知らないか。一斗の兄弟と幼なじみ」

一斗「なんで、あいつ等が来ると大変なんだ？」

作者「もつともな質問だ。それはな、この真つ白な超空間は、メイ
ン級の人間しか入れないんだっ！　つまり、今後長らく出る予定の
無かった彼らが……」

一斗「そんな話、聞いてないぞ……」

作者「今、閃いたから」

一斗「おいっ！」

ベリア「それで、何が大変になるんですか？」

作者「ん？　作品が、壮大になりすぎた」

アン「へ……？」

作者「本来この作品は、百話あたりを目処に前後二十話で完結させ
る予定だった」

クリス「ふむ……」

作者「今は終わりが見えん。落ちも見つからん。むしろ、続けたく
ない」

一斗「作者としてあるまじき発言」

作者「すでに執筆済みの十話までがおじちゃんになった」

アン「あー……」

一斗「ドンマイ」

ベリア「が、頑張ってください！」

作者「もしかしたら、この超空間も回数が減る」

クリス「それは別にいいですが、今までの作品のように潰さないでくださいね？」

作者「努力……する。ちょっと、帰るわ」

クリス「ええ、後は任せてください」

作者「あ、SPEEDのミスティッカー欲しい」

消える作者

一斗「ミスティッカーって……」

クリス「さて、暗い空気は終わりにしましょう。何故な魔学でしょう？」

一斗「なぜ知ってる」

クリス「居なかったときのことは、作者に聞きました。もつとも、この中にいないことには覚えてすらいませんが」

一斗「まあ、いいか。締まらないけど、何故な魔学始めるか」

アン「はい、分かりました。えっと、召喚についてですね？」

一斗「頼んだ」

アン「召喚は大別すると二種に分かれます。

既知召喚、これは普段見知ったものを遠距離から呼ぶものです。

未知召喚は、見たことないものを召喚するもの。さらにこの中に、

伝記召喚と相性召喚があります」

ベリア「相性召喚は俗称です。……正確には純魔力相性召喚。使い魔召喚とも呼ばれています」

アン「ありがとう、ベリア。これは、魔力相性がいいもの呼び出します。」

例えば、炎の魔法が好きと言う方ならそれにちなんだものが呼び出されやすくなります。火鼠や火竜などです」

一斗「なるほど」

アン「そして、今回の召喚は伝記召喚に分類されます。かつて存在を確認されていたもの呼び出すわけで、相性召喚に条件を付け、より高難度にしたものなのです」

クリス「召喚された人間は、大抵が召喚主と恋をします」

一斗「……その心は？」

ベリア「伝記召喚は理想の体現です。……出てくる人は、召喚主の理想なんです」

アン「私の場合は違いますが」

一斗「……へ？」

アン「こんな事で呼び出されるなんて、可哀想な人とか」

クリス「さて、そろそろ帰りましょうか」

一斗「そついや、前は気付いたら元の世界に戻ったけど、どうやったら帰れるんだ？」

クリス「ベリア、アン。少し後ろを向いていただけますか？」

一斗「どうしたんだ？」

アン「なんとなくイヤな予感がします。ベリア、素直に従いましょう」

ベリア「はい、姫様」

クリス「さて、肝心の帰り方ですが」

一斗「うい」

クリス「この空間を司るものが消すか、この空間を存在付けるものが消えればいいのです」

一斗「どういうことだ？」

クリス「空間を司るものとしては、作者から私が譲り受けました。空間を存在付けるものは、君自身」

一斗「ふーん……？」

クリス「つまりですね……こういうことです」

一斗「え？ え？ なんで、バットなんて持ってるんだ？」

クリス「なるほど、これはバットと言っんですか。素晴らしい武器ですね」

一斗「いや、それ武器じゃないから。……………ん？ 武器と認識してるものを持つてるのか？」

クリス「なかなか、察しがいいようですね。では、おやすみなさい」

一斗「ま、待った！ ……ぐぼあっ」

クリス「この程度も避けられないとなると、勇者となるのは当分先の話になりますね」

一斗「いつか……………いつか絶対本編で殴り、とばす……………」

結局やっぱり窒息死（後書き）

作者「……パソコンが欲しいがんす」

一斗「修理に出せ」

作者「……はい」

一斗「で、どんな話になりそうなんだ？」

作者「言うわけないだろう」

一斗「へへっ。バレた」

作者「まあ、次回は大どんでん返しとだけ言っておこう」

一斗「四話にして……」

作者「それでは！」

一斗「さよならー」

………夢？（前書き）

今回は短いです。

また、あまりに雑な修正しかしていないので、そのうち直す……かも

……夢？

どうしてくれようか。

あの鮮烈で、苦痛をともなったものを夢にまでみて、一斗は無性に腹が立っていた。

「あ、動くや」

とりあえず、さっきのような痛みは感じない。文句を言おう。ついでに、あの胡散臭い野郎は殴る。絶対殴る。首締め返してやる。

「ああ、気がついたのね。よかった」

「あれ？ ……木崎先生？」

上を見してみる。知らない天井じゃなかった。保健室の仕切りが見える。隣にいるのは、保健室の番人。

つまりは、どういうことだ？

一斗は考えた。そして気付く。

「夢……オチ？」

「ん？ どうしたのかしら？」

「壮絶な物語序章の夢を見ていました。びっくりするくらいリアルな夢。最後はきつと首絞められました……」

「きつとって……」

くすりと笑う先生。事実なのだが、そうは受け取ってもらえなかったらしい。

「ところで、ぼくちゃん一体どうしてここにいるんでしょうか？」

「保健室の外に落ちてました。ほら、その窓の下に」

「商店街にいたはずなんですが……」

一体どこからが夢だったのだろうか。

「ああ、ご両親に連絡するつもりだったのだけど、お家が留守だったから弟さんに連絡したわよ。今日は試合だったのに申し訳ないわね……」

ちなみに、救急車はあと一歩だったらしい。

普通そちらが先のような気もした一斗だったが、迷惑をかけずに済んでほっとした。

「……………ん？ 優斗に話した？」

「ええ、そうね。サッカー部の顧問の先生に話してもらったように言ったの。試合は終わっていたら観たいだから、伝わったかどうかは分からないけど」

すぐさま起き上がる一斗。

「来てる……。だいぶ近づいてきて……。うわぁ、嫌な予感しかない……。えっと、先生。すぐそこまで優斗が来ているみたいなので、そろそろ行きます」

「それは、双子特有の感覚かしら？」

「ええ、まあ。これは走ってますね。ちょっと、もう行きます！」

「ああ！ 原因不明で倒れてたのに！？」

走り去っていく一斗。止めようとした木崎だったが、すでに角を曲がって見えなくなってしまった。

「まったく、落ち着きのない。…………ご両親にもう一度連絡しておきましょう」

＋
＋

耳に当てていた携帯をポケットにねじ込むと、亜弥は苦々しい顔を
をした。

「あゝっ!？　一斗のやつ電源切った!」

亜弥の叫びは、当然先行していた優斗にも届く。

「そりゃそうだ。逆に、いままで切ってなかったことの方が不思議
だよ……」

「なんか言った?」

「いえ、なにも。……それより、亜弥は先に正門に行って待ち伏せ
していて欲しいんだ」

「分かった。挟み撃ちね」

これ以上無いほど、ツーと言えばカーなのである。さすがは幼な
じみ。

真正面から行ってあの兄を簡単に捕まえるなど、そうは問屋が卸
さない。

双子センサーを持つのは優斗だけではないのだ。

今回はそれを逆手に取り、亜弥の待つ正門に追い込むという作戦
なのだ。

それだけではない。優斗にはさらにもう一つ、場合によってはこ
ちらの方が大切な問題があった。

走り去っていく亜弥を見て、優斗は少しだけ嬉しくなる。

「これで、とばっちりを受けなくてすむ」

優斗にしたら笑えないのだ。まさに死活問題である。

彼の兄は、しかられている最中に別の人間を引き込むことを最大の特技としているのだ。もちろん、主な被害者は優斗である。

しかし、今回の作戦は違う。彼自身の役は追い込むだけ。

亜弥が捕まえたところを遠目で確認した後、回り道して帰ればいい。完璧である。

「さて、この感じだと今は職員室あたりかな？」

まさしくその通りである。どこかにあるはずの、サンタ袋を探していたのだ。

いや、一斗にチョコの未練はない。むしろカカオ農場の子供たちに配りに行きたいほどだ。

重要なのはその別、学生鞆だ。ひとまとめにして袋に入れてしまった。

中には、漫画に筆箱と教科書だけなのだが。「漫画が最初なのがミソね？」とは、一斗の言葉である。

「あつ！ 二階に上がった！！」

慌てて近くの階段を駆け上がった。二人の間には、すでに四クラス分の距離しかない。

「また上がった!」

さらにもう一つ上へ。

「あつ! 下がった!」

慌てて下がり、もう誰もいない廊下を走る。残りは二クラス。

「しくじった!? 迷わず下に降りてる!」

兄が降りたはずの階段を駆け下りる。

「サッカー部なめんな! って兄ちゃんいないし!? まさか外!」

きつと階段の小窓から出たのだろう。

「……いたあつ!」

その距離、二十メートル。走れば追いつく。

すぐさま走れるのならば、だが。

「どうやって出たのさっ!」

優斗が首を出したのは、まさに小窓。肩から先はどうやっても出そうになかった。

「ふっふっふっ……残念だったな弟よ。きさまらの考えなぞ、校門の少し前で止まった瞬間にお見通しよ。安全な裏門から逃げさせていただく」

意気揚々と……と言っわけには行かない。
優斗の足はサッカー部一なのだ。

「正直、リベロなんて高校生にやらせるなよと。フォワードに置いとけば目立つし役立つっての」

もしくは、ウィングバック。

「今時、はやんないかもだけど」

一斗は気づいた。こんな事考えてる場合じゃない。

「たぶん、亜弥は正門に回った。優斗が時間を合わせるために止まったから、それは確実……………よし、裏門だな」

亜弥センサーが無いことが悔やまれる。

かといって、ゆっくりし過ぎると優斗に捕まってしまうだろう。この時点で優斗の目論見は失敗しているのだが、一斗にはもちろん関係ない。

「迷わず行けよ！ 行けば分かるさあつ……………あ、あ……………あはは……………」

裏門は、地獄の一丁目でした。

「い、一応気を失って……………ぶげらっ!？」

最近伸ばし始めた髪を耳に掛け、亜弥は携帯を取り出す。

「ふう……。優斗、裏門。五分以内に来て」
『……はい』

なんというか、今日の亜弥は修羅な気がして優斗は携帯を閉じた。

「いったい何したんですかお兄様……」

作者「本日は、何故な魔学お休みです」
一斗「そりゃ、使ってないもんな魔法。てか、なんで今回は短いんだ？」

作「ビコーズ、イツツTUNAGI!」

一「うぜえ。しかも、その割には時間かけすぎだし!!」

作「それにはね、富士山くらい高く、摩周湖くらい深い理由があるんだよ」

亜弥「なるほどね。つまり微妙な理由、と」

一「初登場ですんなり異空間に馴れてる……」

優斗「まあ、事前に作者から聞かされていたわけだしね」

一「ああ、なるほど」

亜「いいから、さつさとわけを話さない」

作「サーツ、イエスマムツ！ 実は10日から連続でバイトがあったのであります！ レジなどという初めての仕事だったので緊張して疲れて寝てしまっていました。申し訳ありませんっ！」

亜「それだけなの？ こんな短い文も書けないほどだったわけ？」

一「正直に、言え。骨は拾ってやる」

作「どちくしょおおおおお！！！！ がショックだったんだあっ！」

亜「へ？」

作「分かってくれる人だけ分かって！ 一周目はかなりのハッピーエンドだったのにつっ！！」

優「えつと……」

作「あんな淑女がアバズレにつっ！！」

一「意味が分からん」

優「作者が暴走したので今日はこの辺でっ！」

一「ああ、さよ～ならっ！」

—「で、どうやったらここから出られるんだ？」
亜「あ、それなら私が知ってるよ。たしか……っと。一斗、あのひもを引っ張るの」

—「まだらの紐っ！？ 暗くないからっ！ さすがに気づくから！
ってか殺す気があっ！？」

優「詳しくは、シャーロック・ホームズ先生が解決した事件へどうぞ」

亜「仕方ないなあ」

—「何っ？ 悪いのは俺なのっ！？ ……亜弥、さん？ なんです
かその重そうな袋は？」

亜「なんでしよう？」

—「超有名な闇医者っぽいものにしか見えないんですが……」

亜「はずれっ。正解はあ」

—「ちよつと、弟さん？ ななななんで体を押さえるのかな」

優「ごめん、兄ちゃん。逆らえない」

亜「あんたがどっかにやった優斗宛のチョコ入り麻袋でしたあっ！
！」

—「ぐぼあつつっ！！！！！」

……夢？（後書き）

ネタバレコーナー！！

—「らしいです」

作「疲れたよう」

—「バイトで？」

作「まあ、ほかにいろいろ。……しかしまあ、ね」

—「どうした」

作「予定外。何故亜弥はあれほどまで怖くなってしまったのか」

—「おい！ まさか、あれほどまでに怖くなったのは！？」

作「全くの予定外。本来は、静かに切れるタイプでした。……育て方間違えたのか？」

—「原因は？」

作「予想外の大幅変更」

—「ちくせう……」

作「ちなみに、次回の更新は一週間後くらいになりそうかもです！」

—「待ってる奴なんかいないっての！」

さすがに場つなぎ（前書き）

スランプじゃないですが、書くもの書くもの気に食わないです……。さすがに間が空いたので、場つなぎ的なものをば

さすがに場つなぎ

前書きで分かるように、難産です

今まで話を六個分書きました。字数にして四万以上。

と言うわけで場つなぎの意味を込め、キャラクター紹介と設定を徐々に書き加えていきます。

ちなみに、そのうちネタバレ的なものも書き加えるかもしれません。
(出演者少なくて書くことないんですもん)

一人目

名・神崎一斗

性・男 年齢・17

出身・地球 能力・魔術(魔力がある)

人間関係

両親に双子の弟一人。

性格

面倒くさがりだが、楽しそうなことには注力を惜しまない。

二人目

村上亜弥

性・女 年齢・17

出身・地球 能力・今のところ無し

人間関係

核家族

一斗、優斗の幼なじみ。もちろん家は隣同士

性格

この子に関しては何とも言えませんっ！

予想外の凶暴化でした

三人目

アンナシエッタⅡ パルシス

性・女 年齢・15

出身・某P国 能力・一通りの魔術。得意なのは精神干渉系。

人間関係

一国の姫。きつと出てくるので、家族は伏せます。

性格

突っ込み。見まごうこと無き突っ込み。

とりあえず、一番苦勞性

四人目

ベリアーデ・アデルタ・イルデガルド

性・女 年齢13

出身・？

特技・速読（本人へのインタビューによる）

人間関係

姉一人。両親死別

性格

臆病。引っ込み思案。怖がり

五人目

クリス・キザキス

性・男 年齢・24

出身・？ 能力・医者。魔術

人間関係

国最高の医者 of 弟子を卒業。旅医者をしていたが、儀式にあわせ呼び出された。
妻が居る……………らしい。

性格

効率を優先するタイプ。
自分の利益を優先する人

六人目

木崎 琴美

性・女 年齢・不詳

出身・？ 仕事・保険医

人間関係

主人公たちの学校の保険医。よくお世話になる。

性格

よく来る双子をまるで子供のように可愛がっている。

七人目

神崎優斗

性・男 年齢・17

出身・日本 能力・まだない。サッカー部

人間関係

一斗の弟。

性格

兄に似ず才色兼備・文武両道。

まだまだ増えていくよ!!

さすがに場つなぎ（後書き）

僕まだがんばる!!

一斗「は？」

いや、こうして地の文で台詞を書いてみたりとか、いろいろやっているわけですよ。

一「LOF?でバハムートに壊滅されたりとかな」

人獣単25コス以上なしで、ダリスバハムなんてバカな奴には勝てません（泣）

そういえば、今日行ったらフェアリーの台詞やら、ワグナスの台詞が変わってた。

なにかあつたんですかねえ？

がんばりますので今後とも、よろしく願いいたします！

一「短いつ!!」

復讐の向かう末（前書き）

計八万字という苦行を乗り越え、我は帰ってきた

ただ、結局凝ってはいけないということでシンプルに直した結果よく分からなくなりました

復讐の向かう末

「一斗は置いてきた？」

当然のように双子の家へ上がり込んだ亜弥はそうたずねた。

「ああ、うん。なんかうなされてた。さすがに強く当たりすぎたんじゃない？」

温厚な優斗でもさすがに気絶はやりすぎだろうとたしなめる。彼の言葉に、に少しだけ小さくなった。

「だって……」

「何があったかは聞かないけど、少し感情的になりすぎだよ」

「……………」

差し出されたイスに腰掛けると、それ以上口を開くことはなかった。

十 十

「………… ああっ！ 亜弥が来るっ！！」

奇声を発して飛び起きた一斗。彼に待っていたのは、複数人の白い瞳。

なぜこつという時の視線は、青とか黒とか茶だったりする人でも白なのだろうか。

あまりに冷たい目に冷静に戻った一斗だった。

しばらく居心地の悪さを体感してから気づく。
見たこともない石造りの部屋に彼は居た。

「ここ、どこ？」

その言葉に、部屋にいた人たちも動き出す。

部屋をかけ出て行く人、おそらく飲みものであるものをカップに移し替える人。

そのうち一人が、一斗に近付いてきた。

まだ、幼さの残る女の子。

「あの、こんにちは。……少々お話よろしいですか？ 今の状況を説明させていただきたいのですが」

「状況？ どういう……」

「えっと、覚えていませんか？ 魔力とか、魔法とか。……私たちのこと、見た事ありませんか？」

夢の……続き？

あれほどまでに鮮明な夢は、さすがに忘れられない。
だから、一斗は夢に乗ってみることにしてみた。

ミッションは例のエセ医者を殴ること。

「いや、分からないや。思い出したら言うから、忘れてる方向で話を進めて。……んで、ここはどこ？」

「そう、ですか。ここは城の医療処置室です」

そこで一斗は気づいた。聞こえている音が日本語じゃない。それでも会話が成立している理由を。

「ところで、なんで口の動きと発音が違うんだ？　もしかして、それが魔法ってやつ？」

実際は一斗自身もどんな魔法を使っていることは分かっている。さらに言つなら、自分が魔法を使っていることも。

さすが夢、とは言わない。エセ医者をお断りさせるために、絶対。

「え、あ、本当ですね。先ほどもすんなり使うことができて驚きでしたが、無意識に魔力言語を使うなんて、才能があるのかも……」
「今はまあ、そこらへんのことはどうでもいいや。それより、なんで俺はお城なんかで眠らされてるのかな？」

途端、声が小さくなる。

「その、詳しいことは……あの、姫様がお話していただけたかと。本来私は司書なので、説明とか向いてないんです……」
「司書？　医者とか看護師じゃなくて？」

ちなみに、今の一斗の本心としては
「ヨッシャアアアツツ！！！！　自然な流れでエセ医者呼べるぜえっ！！」である。

「あ、はい。あなたを診てくださった方は、仕事があるということでは居ません。」

……呼びに行かれた方が居るので、すぐにいらっしゃるか」と

そこで一瞬、術式に流す魔力を止めた一斗。

「チイツ、まだ居ないのか……」

分からないのを良いことの悪口であった。

「ええと……」

「ああ、ごめんね。やっぱり馴れないから……。説明がダメなら、名前くらいは聞かせてもらえるかな？ えっと、俺の名前は神崎一斗。よろしくね」

「……べ、ベリアーデ・アデルタ・イルデガルド………ベリアでいいです」

そりありがたい。絶対に覚えりやれない。

「名前が先に来るのは、やっぱりお国柄かなあ」

それだけ個を主張したいのだろう。

もちろん日本人は家を主張したいのだ。江戸時代あたりの平民は、豆腐屋のはちべえやら笠屋の助さんなんて、名前で呼んでいたらしい。

一斗にはどうでもいいが。

「ああ、お目覚めになられたようですね」

不意に入ってくる人間にも覚えがある。
たしか姫だ。

タイプ：突っ込み。

「どうも、初めまして」

もちろん忘れた振りをする。

「姫様、彼は大儀式の間での出来事をお忘れになってしまったよう
です」

「……わかりました。すべて説明いたしましょう。皆さん、申し訳
ございませんがイルデガルド司書官を残し、外へ。様態が変化した
場合、すぐに呼びますので」

さっきとは比べものにならないほど礼儀正しい姿。
姫ってこういうものなのだろうか。

「かしこまりました。他には床に伏せて居るものもおりません。隣
の部屋に控えておりますので、いつでもお呼びください」

「隣の部屋ってがんばりや聞こえるじゃないか」

全員が出ると、すぐに疑問を口にする。

「ベリアさん、頼みます」

「はい……」

「ああ、魔法か……」

きつと、何でもありなんだろう。一斗は納得した。

「少し異なりますが、そこはおいおい教えて差し上げます。まずは、
あなたが置かれている状況についてです」

それから始まったのは、まさかの国史語り一時間。

途中で飽きた。

「長い。単刀直入に頼む」

「まだ半分ですのに……」

「どうせ、俺は魔を統べる王を倒すために召喚された勇者だとかいうんだろ？　なら、国史なんてどうでもいいよ」

二人が、息を飲んだのが分かる。

「うわぁーい。これぞ貧弱な我が想像力。テンプレ夢だよ」

貧弱すぎて腹が立つ。やるなら大スペクタクルくらいやれと。

「ならば、話は簡単です。私たちを助ける振りをしてください」

「……はい？」

「振りだけでいいのです。あなたを安全に元の世界へ帰せる術を見つけるまで」

「……………なぜに？」

予想外でした。

「召喚とは術者、今回の場合私の想像力が鍵となります」

「うん？」

「今回の召喚の際に私が考えた事はこうです。……こんな無限とも思える可能性に引っかかるなんてなんて運の悪い人だろう。」と

おそらく、ここでもし人物が現れるのならば、たとえば毎日のように叱られている人間だろう。たとえば毎日のように成功を他人のものとされている人間だろうと。

叱られている、のは亜弥に。他人を優斗に変えれば……

「なんて、俺」

「……やはりでしたか。本来ならば勇者を呼ぶ際に必要な想像とは、たとえ全く同じ能力を持つ人間と比較しても抜きん出る求心力や、なにもしなくても生きていけるほどの異常な運などであるのです」

「それ、なんて我が弟」

先の話でいくとすべての運を弟に吸い取られ、拳げ句の果てにダメ人間として一斗はここに呼ばれたという事。

もう、なんというか……

「どんだけ自虐的な夢なんだよ……」

「こうなってしまったのは、私が召喚の儀に全霊をかけなかったがため。この身に代えても元の世界にお返しいたします」

呟いた言葉は聞こえていたのか分からない。
夢で騒いだってしかたの無いことだ。

そう頭を降って、一斗はため息をついた。

それは絶望ととられたらしい。

「申し訳ございません。私たちもこちらの世界で苦痛を抱きなさるぬよう、最善を尽くします」

寝たままの一斗にとって、まさに視界から消えるほどに深いお辞儀であった。

「いや、もう起きたことは仕方がない。この世界でやりたいことをするだけです」

主にエセ医者を殴る件で。

自虐度の高い夢は割り切った。せいぜいなりきって油断させてやるんじゃないか。

「お待たせしましたね、アン。ついでに魔力測定球も持ってきてましたよ」

「ありがとうございます。クリスさん」

……噂をすれば何とやら。

ここからが、一斗にとつての勝負である。

極力自然に、少しだけ眉をしかめて目標を見る。

「ええと、この方は……？」

「こちらが、先ほど言っていたあなたを診てくださった方です。クリス大医、彼は召喚の儀での出来事をすべて忘れているようです」
ベリアがすぐさま説明する。

「よしよっ……と。なんだか、危ないところを助けていただいたみたいで……。ありがとうございます」

姫様が居たときには寝たままだった体を起こしあげる。しっかりと礼をしているように見せ、殴りかかる一斗の布石だった。

「いえ、仕事でしたので。それよりアン、皆が現れる前に測定を」

「ええ、そうですね」

なにやらアンから手渡される水晶のような球体。

なすがままに一斗が受け取ると、なにやら中心が濁ってきた。

「エス……SEEKER？ 探し人」

「ああ、やはり違いましたか……。それにしても真理追う人とは勇者よりも珍しい」

いつたい 彼女がなにを言いたいのか一斗には分からない。

しかし、その場にいる一斗以外の人間の表情には、見覚えがあった。

「相当なトラウマみたいだなあ……」

それは、一斗と優斗を比べる時の顔。
ただ、よく見ると少し違っていた。

「残念でもあり、ほっとしたという気持ちもありますね。これで、厄介な旅をさせなくて済むのですから」

微かな喜びが含まれていたのである。相変わらず、エセ医者だけは常に胡散臭い笑顔で分らない。

だが、そんなことより
「全く、状況が把握できません」

言葉の意味は分かるのに、話の内容にはついていけない一斗であった。

「そ、そうですね。では説明いたしましょう」
慌てて説明を始めるアン。

この水晶球は魔力測定球というらしい。名の通り、そこに通した魔力の持ち主を魔力資質を文字にして示すらしい。

「勇者ならばBRAVERなど。SEEKERは学者などに多いです。例えば」

そう言って水晶球にアンが触ると、RULERと記される。

「安定者です。ベリアさん？」

促されてベリアが持つと、PRESERVER。

「保護者。守り抜く人と言う意味です」

意味は分かるよ、と頭の中で一斗はつぶやく。何故英語なのだろうか。

「クリスさんは……」

一斗の言葉でクリスに水晶球が渡る。

しかし、そこにはなにも映らなかった。

「この通り、何度やっても何故か映りません。特に才能がないのでしょうね」

「……クリス大医。……さらりと言いますが、必ず何かしら映るものですよ?」

小さな声でそう言ったベリアを、アンが止めた。

「いいじゃないですか。ここには奇人がそろっているのだと言うことにしましょう。あなたの保護者ですら、近年希に見るほどなのですから」

クリスから、一斗へと渡される水晶球。

そのためにベッドから足を出した一斗は、ここが最善のタイミングだと悟った。

「首締めの恨みいつ!!」

渡された水晶球をクリスの顔面へ投げつける。

驚いたのだろう。目を見開いて水晶球を受け止める。

もちろん、それは布石だ。一斗の目的は自分の手でエセ医者を殴ることなのだから。

武道未経験の一斗でも分かる。腰だめからもつとも最短を通る道を彼の拳は進んだ。

油断しているいまならば、今の攻撃はどんな人間でも受けられないであろう。

「そう簡単に私が信じると思いましたが？ 少年」

当然のごとく伸ばされた腕を受け流し、綺麗な一本背負い。

「ああ、手が滑ってしまいましたね。受け止めてください、少年」

何を、とは言わない。

一斗には見えていた。

BRAVERと浮かび上がった魔力測定球が目の前にあることを。

「ふぎやつ!？」

絶対わざとだとか、お前が勇者だとか、諸々の文句を全て持って、一斗は闇に落ちていった。

作者「ようこそ何故な魔学の世界へ！！　今回は、何もなかったこの空間もグレードアップいたしました！

見てください。この一本の樹から作られた、すばらしい木の机。いままでは全員が突っ立ったままでしたが、すばらしい作りのこの椅子。

もちろん、いつまでも中身が無くならないティーポッドと、まるで某ミニーちゃんの家にあるかのようなダイエットクッキー！！
……それでは、みんなを呼びましょう」

皆も慣れたもので、当然のように席に着いてしまう。

アン「キリンさんっ！！　私は物を申したいのです！」

作者「え？　俺の解説スルー？」

ア「そんなことどうでもいいのです！！　このコーナーの名前っ！」
作「はい？」

ア「だから、何故なに魔法学。これ、間違ってます！　それどころか、作中にでてくるものはほぼ魔術です！！」

作「あ……………ああっっ！！！！」

ア「初期設定忘れてどうするんですかつ！　あなたバカでしょっ？　バカですよっ！！？」

作「め、面目ない。パソコン返ってきたら直す。携帯だと直し辛いんだ」

ア「言質取りましたからね。気をつけてください」

作「はい……」

一斗「今日は俺が被害者じゃないみたいだな」

ベリア「えと、……気をつけた方がいいかと」

一「へ？」

作「デス・ペナルティ……」

一「あんぎゃ〜〜〜〜……………」
ぽちゃん

ベ「今日はどうやったんですか？」

作「落とし穴。ゴートウーヘル……」

復讐の向かう末（後書き）

〴〵何故なに魔法学のコーナーが謝罪場になっていた件について〴〵

作「すまん、正直後書きが読まれるとは思えなかった」

一「で、いつ直すんだ？」

作「パソコンが修理から返ってきたら……」

一「だいたい、一ヶ月空けることから間違ってるよな。暇なのに」
作「……………携帯に触れる時間が少ないんだ。でも、ごめんなさい」

ゲシュタルタルの野望（前書き）

私のGWは今日までだったのさ！

……………ごめんなさい

ゲシュタルタルの野望

「なるほど、記憶を失っていたわけではなかったのですね」

再びベッドへと寝かされた彼を見やって、アンは納得したように頷いた。

「……すごくうまい演技でしたね」

ベリアも同意する。しかし、彼だけは違った。

「二人ともいつ何時、誰に襲われるかなんて分かりません。決して油断をしないことです」

「大丈夫。あんな風に突然襲われるのはあなただけです」

＋　　＋

「夢だけど！ 夢じゃなかった！！ …………… かも？」

「ごめん、意味が分からない」

起き抜けたベッドの隣には、亜弥が立っていました。

「なんか、続き物の夢を見た。ゲームした後から保健室で起きるまでの間と、気絶させられてから今までの間で」

それが妙にリアルだったと語る一斗。覚えているままにこっそりと魔力言語を試してみる。

「なあ、今って何時？」

「七時半。優斗がご飯作ってくれてるわ」

そして気付く。

「……伝える相手も同じ言語だったら、成功してるか分からないじやん」

意味が分からなかった亜弥はスルーする事にしたらしい。

「……？ 制服シワになっちゃうから、早く着替えなよ」

「誰がこうしたと」

「その話、掘り返すんだ？」

「俺だって何が起きたのか分からないっの！」

大声で訂正する一斗。

しかし、その数秒後には、

「……いや、あの、私が全面的に悪かったですので、その振り上げた手をゆっくりと降ろしてくださいな？」

ベッドの上で土下座していた。

そして亜弥がでていった後、着替えながら一斗は泣いた。

食卓に着くと、メニューを上げ始めた一斗。

「ほっけの塩焼き、わかめの味噌汁。たけのこの炊き込みご飯。……くそう。俺が作るうとしていた物を全部作られた」

「冷蔵庫にそれくらいしかなくて」

優斗の弁明。それに、一斗は手を挙げて答える。

「いや、気にしなくて良いよ。当番俺だったし。んで、母さんたちは？」

「明日から連休だから、二人で旅行だって。若いうちにあんなたちを引き取ってそんな暇がなかったから、今からでも楽しませてねだって」

「養子を開けっぴろげにして、あまつさえそれを理由に状態の分からない息子をほったらかして旅行」

親として、大人としてどうなのかと一斗は問いたくなった。

「まあ、明日病院に行ってみようよ。入院とかになるかもだけど、そのとき連絡すればいいわけだし」

「帰ってこないと予想」

「ははっ……。とりあえず兄ちゃんは安静にして寝てなよ」

促され、体温を上げないように軽くシャワーを浴びて布団にはいる。

「お休み、一斗」

「ああ、また明日」

亜弥は一斗が布団にはいるのを確認して帰っていった。
「まったく、心配ならあんな強烈な蹴り入れんなよな……」

意識を失っていた時間はあつたはずなのに、夢のせいで全然眠った気がしない。そう思った次の瞬間に、一斗の意識は彼方遠くへ飛ばされてしまっていた。

＋
＋

「はい、やってきました異世界探訪のお時間です。今回もお相手は私、一斗がつとめさせていただきますっ」

もう、目を開けずとも湿った空気といやに早い目覚めで分かっていた。

「あの、……お鼻大丈夫ですか？」
「へ？ 鼻？」

触れてみると、なぜだか痛い。

「魔力測定球を顔で受け止めていました。……また、忘れた振りですか？」

「いや、純粹に覚えてない。通じない以上、とぼける意味はないよ」

凝っていた首を回して、一斗は気付いた。

「朝？」

「はい、もう日が昇って数時間が経ちます。……召喚の儀は黎明、夜明けを迎える前という決まりがあるんです」

「これはイヤな臭いがプンプンするな……。そのうち、精神的に倒れちゃったりして」

数時間前。それは体感時間で向こうの世界の日の入りであるのだ。

まあ、その時にしないと分らないかと、一斗は体を伸ばした。

「ん……。さて、これからの予定ってどうなってるの？」

「ええと、何故そのようなことを？」

「いや、だって勇者として呼び出されたわけでしょう？ どうせいるんな儀式があるんだろうなあと」

「そう言うことでしたら、今日は一日休みです。……まあ、儀式の手順やマナーなどは覚えていただきますけど」

「ああ、一般常識も教えて欲しいな。あと、さっきの頭に直接魔術式だっけ？ を覚えさせる方法で何個か教えて」

いきなり要求が多い。などとはそうは思わない。

一斗は明らかに被害者なのだ。

しかも、もしかしたら一般的な召喚とは違って少々厄介でもありそうなわけで。

この世界で勇者を見つけるか、優斗を連れてくるか。一斗には、どちらかを成功させる必要があるのだ。

主に、我が身可愛さという理由で。

「どうせ、元の世界に戻す方法はないんだろ？」

これが彼唯一の手札であり、切り札だった。

「いえ、あるにはありますが……」

もろくも崩れさったが。

「え？　じゃあ返してよ」

「十年は無理です」

まだ望みはあった。いや、解決しないという意味では、希望なんてなかった。

「……なんで」

「来たときと同じ方法を使うんです。……姫様が十年間かけて溜めた魔力を使った召喚。それが必要です」

「……さあ、別の方法を探そう。と言うわけで、お願いします」

ベリアは逡巡した後、小さく頷いた。

「姫様の許可が出ましたら。……私にはそんな権限、無いですから」「危険が無いのでしたら、いくらでも許可しますよ。魔術の有無はこの世界で生死を分けることもありますから」

面白ければ多少危険でも！

とは、突然現れたアンに出された許可を取り消されたくないため言わないが。

「朝食はお済みになりましたか？」

いつの間にか話の先手をとられてしまったらしい。

「まだ。今起きたところ」

なんと、聞かれて気付いたが一斗は空腹であった。

「体感ではさっき食ったばかりだったのに……」

まさに不便な召喚である。

「あら？ いつの間にお着替えに？」

重ねて言おう。まさに不便な………

「いや、そうとも言い切れないか」

「……？ どうかありませんか？」

「いや、俺にもよく分からないや」

詳しい原理は。

「……そうですか。では、着替えと食事を用意させましょう。その後で話があります」

「ありがとうございます」

要件はそれだけだったのだろう。すぐさまアンは出ていこうとした。

「さてはて、一体いつになったらきちんと自己紹介をしていただけるんですかいな？」

「それについても事情があります。避けうるべき危険は近づかないに限りますので」

そのまま、出ていってしまった。

「君が名乗らないのも?」

「……あなたも、名乗らないでください」

同じ理由らしい。

十
十

「て……てこずらせやがって……!」

いわゆる異世界マナーについて。

曰く、この世界では、音を立ててスープを吸い込むらしい。

曰く、箸は存在しないらしい。

曰く、の意味って何だろう。

「……やばい。危うくゲシュタルタルするところだった……」

「なんですか? ゲシュタルタルって」

「……人の名前」

「ごめんなさい、ゲシュタルタルなんて人いません。」

「それは置いておきましょう。皆さん、自己紹介しましょう」

と、訳が分からない空気になった状況を姫様が颯爽と現れ、叩いて砕く。

それに一斗は小さく感謝していた。

「さて、そろそろ自己紹介をいたしましょうか。あなたの魔力も安定してきたようですし」

「……魔力？ 安定？」

お姫様はその声に頷く。

「魔力が安定しないうちに名前を交換することは、契約をすることと同義なのです。安定してないうちは魔に対する抵抗力も皆無ですから」

「あー……」

悪魔契約みたいなものかな、などと一斗は考える。

「そのため、呼び出された勇者は通例として1〜2週間名前を名乗ることを許されません。……本来ならば」

テーブルマナーを教えるためと、正面に座っていた姫様は座り直す。

その顔には少し、影が見えていた。

「あなたは、私のせいで誤って呼ばれてしまいました。謝罪のためというわけではないのですが、その2週間のあいだにこの世界で生きていけるようにいろいろと教えたいと思います。テーブルマナーから、戦闘に至るまでを」

当然の話だ。責任感も強そうだと、一斗は思った。

「……って、戦闘？」

「はい。勇者とは、私たちが対抗しきれない魔物を葬るために呼び

出されているわけですから。それなりのことはできないと……」

だからぼんと膝を叩き、一斗は話を遮った。

「なるようにしかならんことは分かった。それはさておき、自己紹介と、いくつか質問させてくれ。……特に、あのエセ医者 of 弱点なんかがあれば最優先で！」

さておくほど諦められなかったらしい。

「エセ医者……ああ、クリスさんのことが。………ないですね。分からないです」

「んじゃ、自己紹介かな」

どうやら、話題転換は成功したようだった。

「……ふふ、ありがとうございます」

バレていたようだが。

「それでは、私から。アンナシエッタ・パルシスです。公の場でない限り、気軽にアンとお呼びください。この国の王の娘であり、この城主でもあります」

「え？ 城主？」

「はい。首都で街一つ消し飛ぶような儀式は行えませんからね。決

まりとして首都から追い出されるのです」

「街が消し飛ぶ……………」

どんな危険な儀式だよ。と、心で突っ込む。

「ええ、召喚の儀は膨大な魔力を使います。少しでも失敗したら、ボン。です」

聞いた瞬間、一斗は自らを指さす。

「これが結果？」

「はい、あなたを呼び出してしまいました」

成功してよかったのか、悪かったのか。

「うまい言葉が見つからないな……………」

また、空気が重くなる。

「次は、私です。…………ベリアーデ・アダルト・イルデガルドと言います。…………少し前に、図書館司書から、勇者の付き人になりました」

ぺこりと頭を下げる。おそらく、空気を読んだ訳じゃないのだろう。

「ああ、よろしく」

自然と口角があがってしまったのは、悪いことじゃないと思う。

一斗は自分に言い訳を試みた。

「私の時と反応が違います!」

「さて、俺の番だな。……その前に、魔力が安定するってどういうことだ?」

スルーしてみるよ。

「まったく……。ええと、見たらすぐ分かりませんか?」

「……まず魔力が見えん」

「……ベリア」

「はい。……クリス大医の仰ったとおりになりました」

納得する二人に、不思議な顔を向ける一斗。説明を促す目を暗に向けていた。

気付いて、アンが頷く。

「無意識魔力拒絶症。魔力異常を起こした方が、防衛反応として魔力を封じることが指します。治療法は、二つ。……そうですね。続きは歩きながら」

アンが立ち上がったことで話がいったん途切れる。

心の中でため息をつく一斗。まだまだ世界を渡った弊害は多そうだ……

作者「今回は、既存の魔法しか出てないねえ」

一斗「何故な魔学は休みだな」

作「もともと、不定期開催のつもりだったしね」

一「しかも何故な魔学で説明したことを、本編でもう一度って……」

作「それは無くすつもりだったんだけど、力量不足でした。これから、切つとこういうことはまま……いや、多々ある!」

—「おいっ!」

作「なま暖かい目で見ていてください」

—「あゝもう、逃げたし」

作「それではまたねっ!」

ゲシユタルタルの野望（後書き）

パソコンの設定やらなにやらの方に集中しすぎ、完全に時間配分を間違えてしまいました。

次からもう少し頑張る！

駄文化促進は幾分か改善される予定です。

期待しないで待っていてください

P / S ゲシユタルトはそのまま崩壊という意味ですよ？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9967j/>

勇者が居なきゃ始まらない！

2010年10月15日22時42分発行